The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	延慶本『平家物語』における平維盛北の方 : 愛する者を救済する・愛する者に救済される存在
Author(s)	ルーンピロム, カナパット
Citation	詞林. 2012, 52, p. 25-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67647
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

延慶本『平家物語』における平維盛北の方

――愛する者を救済する・愛する者に救済される存在――

ルーンピロム・カナパット

一、はじめに

平維盛北の方は、重盛の嫡男維盛に嫁ぎ、六代という男の子と女の子を産んだ。しかし、彼女の境遇は決して恵まれたものではない。幼い頃に父大納言成親が殺され、都落ちの際には夫と離別、夫の死後は息子が源氏側に渡され、不安や離別に苦しんで不幸を背負う女性として描き出されている。

北の方の造型に関して、彼女のみに重点を置いて考察する論考は少ない。その中で、郭順伊氏[1]の論考では、次のように、諸本における彼女の造型が論じられている。

維盛北の方は物語内であくまで脇役としての立場にある。相当量を占める維盛描写の中で、維盛の妻は頻繁に登場するものの、その姿は合戦に臨む夫を気がかりに思い、常に涙する、非力な印象の妻としての表れでしかないのである。維盛北の方は、『平家物語』に描かれる他の女性説話の主人公達に比べ、特に目立った特徴や個性を持つわけでもなく、夫を慕うごく平凡な決まりきった形で描かれる傾向にある。（中略）その姿はどの諸本も、離れてしまった夫への恩愛と危惧の念を抱く薄幸な妻の姿が強調されたものである。

右のように、夫との離別による苦渋を抱える姿を強調し、非力な印象を与える北の方造型の共通点が指摘されている。さらに、夫を思慕し、最終的に亡くなった夫のために出家し菩提を弔う点で、他の女性登場人物と同様に設定されていることが論じられている。

多くの論考で、北の方の造型は、妻子に深い恩愛を持つ維盛の性格を論じる際に取り上げられている。維盛の造型に関して、池田敬子氏[2]と牧野淳司氏[3]は、入水の直前、維盛が念仏している際に、妻子のことを思い煩い、心が揺れ動いてしまった場面に着目し、妄念とされる妻子への恩愛を論じた。又、妻子を浄土に導くという滝口入道の説法により、その妄念を翻し、一心念仏することができたことに、往生の構想が捉え

られると指摘した。ここで興味深いのは、往生へと向かうきっかけとされる、妻子を浄土へ導きたいという維盛の意志である。この点を考慮すると、北の方は郭氏が指摘した他の女性登場人物のように、単に男性から後世救済を求められる存在としてだけではなく、夫に救済される存在としても造型されていると考えられ、北の方の造型を再検討する余地はある。

妻子への深い恩愛を持つという維盛の性格自体についてだけでなく、物語が維盛と平重衡の対比を意識して描き出しているとする見解もある。秋山寿子氏[4]は、『平家物語』及び多くの文献を参照し、「二人（執筆者注・重衡と維盛）の出自のみならず、容姿、才能にも極めて恵まれたこのペアが一門内部だけでなく、同時代の人々にも強く印象づけられた」と述べている。さらに、鈴木則郎氏[5]は、維盛と重衡の記述に着目し、「一の谷の合戦敗北後の平氏一門の没落の運命を、維盛と重衡の悲劇的生の展開に焦点を合わせて語ろうとした」という物語の姿勢を指摘した。その他に、四重田陽美氏[6]は、延慶本における維盛と重衡の記述を対照し、次のように述べている。

> 妻子に対する恩愛の情を抑えきれずに悩みつつ、妻子に逢う事なく出家し熊野の海に身を沈める維盛と、生け捕りの憂き目に逢い、出家も許されないまま、内裏女房や妻に別れを告げるために逢うことのできる重衡は、『延慶本』では、類似的な表現や文体を用いながら、全く対照的に描かれていた。維盛の物語と重衡の物語という二つの物語は、おそらくはそれぞれ全く別個の説話から成り立ってきたのであろうが、それを、あえて対照的に描きあげる事によって、二つの物語が絡まり合いながら、またそれぞれの物語としての色合いを深めていく構造を見る事ができる。

右のように、重衡が死の前に、愛する者との再会を果たしたのに対し、維盛が妻子との再会を断念して入水したことに、彼らの対照性が捉えられると論じている。ここで見過ごすことができないのは、重衡の生捕りのことをきっかけに、維盛が妻子との再会を断念するという設定であり、二人を結びつけようとする物語の姿勢である。四重田氏の論考では、重衡の生捕りの出来事と、維盛が妻子との再会を断念することとの結びつきは高野山へ導線を変更する場面との関わりでのみ着目されているが、実際は他の場面にも表されており、特に維盛の入水の直前に強調されている。よって、物語が重衡の生捕りの出来事を繰り返して語ることはどのように捉えられるのか、維盛の最期における妄念の存在や、妻子を救済したいという願望に関わっているのかを考察する必要がある。

以上の問題意識から、まず北の方の行動を中心に、彼女の苦悩とその克服の様相を第二節において考察する。第三節に

おいて、妻子を救済するという維盛の造型を検討する。さらに、維盛と重衡の愛する者との再会をめぐる対照性、重衡生捕りの出来事と維盛が妻子と再会することとの結びつきを考察し、それが維盛の入水前の妄念と、妻子を救済するという造型とどのように関連しているのかを明らかにする。

二、北の方の苦悩とその克服の様相

本節では、維盛の生前とその死後の二つの項目に分けて、北の方の苦悩とその克服の様相を考えることとする。

二・一　夫の生前

まず、北の方が平家の都落ちの前に維盛と別れる場面を見ていく。平家は木曽義仲の軍が都に迫ってくることを聞いて都落ちを決定した。その時、一門の多くが家族を都落ちに同行させるが、維盛は妻子を都に残すと決意した。別れる際に、維盛はどこにでも妻を連れていきたかったという思いを吐露しながら、流浪の旅や敵襲の危険を考え、都に残るようにと北の方を説得した。又、次のように遺言を残す。

世ニナキ者ト聞ナシ給トモ、アナカシコサマナムドヤツシ給ナ。イカナラム人ニモミヘ給ヒテ、少キ者ドモヲモハグヽミ、我身ノ後世ヲモ助給ヘ。

〔第三末「惟盛北方事」六四頁〕

右のように、もし自分が亡くなったと聞いても、出家せず再婚し、子供を育てて菩提を弔うようにと北の方に遺言をした。その遺言を聞いた北の方の反応は次のように描かれている。

年来日来ハ志シアサカラヌヤウニモテナシ給ツレバ、我モサコソタノミ奉リツルニ、イツヨリ替リケル心ゾヤト思コソ口惜ケレ。前生ニ契アリケレバ、我ヒトリコソ哀ト思給トモ、人毎ニナサケヲカクベキニアラズ。又人ニミヘ候ベシトモ思ワズ。少者共モ打捨ラレ奉リテハ、イカニシテカハアカシクラスベキ。誰ハグヽミ、誰アワレムベシトテ、カヤウニ留メ給ゾ

〔第三末「惟盛北方事」六四頁〕

北の方は都に残されることと、再婚せよという夫の思いを承諾できず、夫婦の契りによる深い恩愛を訴えた。場面の終わりに、北の方と維盛の馴れ初めが記されている。北の方は維盛と結ばれる前に、かつて後白河法皇から文を送られたことがある。しかし、その文の返事を拒否したがゆえに、父に親子の縁を切られた。法皇の申し出を無視する態度を取った原因は、彼女が維盛に思いを寄せていたからである。その思いを彼女に仕える女房から聞いた維盛は、密かに北の方を迎えにきた。再婚を承諾しない北の方の言葉に続き、この馴れ

初めが置かれていることを見ると、死別しても変わらない夫に対する深い恩愛を示唆する物語の意図が窺われるだろう。

ここで注目すべきは、北の方が維盛と別れる際に、抱え込んだ苦悩を告白することである。

父モナシ、母モナシ。都ニ残留リテハ、イカニセヨトテ、フリステ、出給ソ。野末山末マデモ引具シテコソ、トモカクモミナシ給ハメ」トテ、人目モツ、マズナキモダヘ給ヲ、見ステガタク心苦クテ、「サリトテハ、イヅクニモ落付ム所ヨリ忿ギ迎取ムズルゾ」ト、ナグサメ給ホドニ　〔第三末「惟盛与妻子余波惜事」七三頁〕

北の方は維盛の袖にすがりついて、波線部のように、恵まれない境遇を吐露した。「成親卿ノ北方君達等出家事」において、北の方の父大納言成親は、平家打倒の陰謀を企てた罪によって流罪となり、後に殺されたことが描かれている。彼女の母が父の死を聞いた場面は次のように記されている。

自ラ御グシヲ切給テケリ。雲林院ト申テ、寺ノ有ケルニ、忍テ参給テゾ、戒ヲモ持給ケル。又其寺ニテゾ、如形一ノ追善ナムドモ営テ、彼ノ菩提ヲ訪奉リ給ケル。若君閼伽ノ水ヲ結ビ給ケル日ハ、姫君ハ樒ヲツミ、姫君水ヲ取給日ハ、若君花ヲタヲリナムドシテ、父ノ後世ヲ訪給モ哀也。〔第一末「成親卿ノ北方君達等出家事」二〇三頁〕

父の死を聞いた彼女の母は出家をして、子供とともに菩提を弔った。引用文に、北の方のことは明確に示されていない。しかし、維盛と別れる際の、北の方の恵まれない境遇についての告白から、父の死を歎いた子は北の方のことと知られるだろう。

以上の北の方の告白から、そもそも持っていた孤独感と、これから頼れる人がいなくなる不安感を抱いていることが読み取れる。維盛はそのような悲歎に暮れる北の方を見ると、傍線部のように、落ち着いたら迎えをよこすと約束して彼女の悲しみを慰めた。

以上のように、維盛と別れる場面において、物語は単に離別を歎く北の方の姿を描き出すだけでなく、その苦悩の根本的な原因として、彼女の孤独感、不安感、夫婦の恩愛を示している。

維盛は都落ちして以来、都に残した妻子を恋しく思い、悲歎に暮れるばかりであった。北の方も「相構テ迎取給へ。少キ者共モナノメナラズ恋シガリ奉ル。ツキセヌ歎ニナガラウベクモナシ」とあるように、自らと子の悲歎を維盛宛ての文に語った。又、一の谷合戦で討ち取られた平家の人々の首が都の中に晒されたことを聞くにつけて、「イカニモ此人ハノガレジ物ヲ」とあるように、維盛の安否を思い煩い、使いを

つかわして確認させた。その使いは維盛の首が見当たらないと報告し、人に聞いたところによると、維盛が病気になり、戦場に出ていないということを語った。維盛の病気を心配している北の方の姿は次のように描かれている。

「①穴心ヅヨノ人ノ心ヤ。所労アラバ、『カウコソアレ』ト、ナドカ告ザルベキ。軍ニアワヌホドノ所労ナレバ、大事ニコソ有ラメ。思歎ノツモリニヤ、病ノ付ニケルコソ。都ヲ出デ、ヨリ、②我身ノワビシキト云事ヲバ一度モイワズ。『只少者共コソ心苦ケレ。終ニハ一所ニコソスマセウズレ』トノミナグサメシカバ、サコソ憑ミタルニ、サテハ身ノ煩ヒケルニコソ。皆人モ具スレバコソ具シタルラメ。野ノ末、山ノ末マデモ、一所ニ有バ互ニ心苦サヲモナグサムベキニ、カヤウニノミナク悲シサヨ」トテ泣給ヘバ、

〔第五本「維盛ノ北方平家ノ頸見セニ遣ル事」二八九頁〕

ここで注目したいのは、北の方が維盛の心中を推し量った箇所である。北の方は、維盛が病のことを知らせなかったことを、①傍線部「穴心ヅヨノ人ノ心ヤ」と述べ、又、都を出て以来、②傍線部「我身ノワビシキト云事ヲバ一度モイワズ。」と語っている。これらにより、心強いという維盛の外面的な性格が示されている。さらに、二重傍線部「思歎ノツモリニヤ、病ノ付ニケルコソ」とあるように、彼女は妻子との離別に苦しむ維盛の心底を推し量ることができる。場面の終わり、波線部に、維盛と一緒にいることができれば彼が抱え込んだ苦悩を慰めたい、という北の方の願望が窺える。

一方、北の方の安否を気遣う維盛の姿は次のように描かれている。

中将モ通フ御心ナリケレバ、「都ニイカニオボツカナク思ラム。首共ノ中ニモナケレバ、水底ニ入ニケルトコソ思ラメ。（後略）」

（北の方への文）「今日マデハ露命モ消ヤラズ。少キ人々何事カアルラム」ナド細々ト書給テ、ヲクニ、

イヅクトモシラヌナギサノモシヲグサカキヲクアトヲカタミトハミヨ

ト書給ヘリ。

〔第五本「維盛ノ北方平家ノ頸見セニ遣ル事」二九〇頁〕

傍線部のように維盛も、北の方が不安感を抱きながら安否を気遣っているだろうと推し量った。そこで、自らの安否を知らせるために、妻子へ文を書いて歌を添えた。この歌の内容から、北の方の再会への期待に応えられないだろうという不安感が読み取れる。

以上のように、維盛と北の方が互いの気持ちを察している

が、これは単なる夫婦の深い恩愛を示すものではない。互いの気持ちが通じ合うからこそ、彼らの苦悩が一層高まるのである。

延慶本においては、維盛入水の場面の終わりに、夫の便りがないことで不安になった北の方が、維盛が入水したことを使者から聞き、「サマヲモ傷、身ヲモ投給ヌベクゾ覚ヘシ」と述べて泣き悲しんだことが記されている。しかし、覚一本のように、すぐに出家して夫の供養を果たしたとは描いていない。

維盛の死後における北の方の経緯について、山根対助氏[7]は『尊卑文脈』をふまえて、北の方が吉田大納言経房と再婚したという史実を取り上げ、彼女の再婚は六代の生命を守るためだと論じている。山根氏の指摘によれば、延慶本は覚一本のように北の方が出家したことを虚構として語らず、しかしながら、再婚するという事実にも言及しないのである。では、物語において、夫の死後、再婚しない北の方はどのように苦悩を克服して、子を守っているのかという問題点を考察する。

二・二　夫の死後

平家の滅亡後、平家の残党狩りが行われ、その中で、維盛の息子、六代の捜索に力が注がれた。北の方は子とともに大覚寺にひっそりと暮していたが、北条時政に見つけられ逮捕された。六代が連れていかれることを歎いた北の方の姿は次のように描かれている。

責テノ事ニ、手箱ヨリ黒キ念珠ノ少ヲ取出テ、「何ニモナラムマデハ是ニテ念仏申テ、極楽ヘ詣レヨ」トテ、若君ニ献リ給ヘバ、母ニハ、「只今離マヒラセナムズ。何クニモ父ノオワシマサム所ヘゾ参リタキ」ト宣ケルニゾ、イトゞ哀ニ思シケル。今年ハ十二ニコソナリ給ヘドモ、十四五計ニミヘテ、ナノメナラズウツクシクテ、故三位中将ニ少モ違給ハネバ、「穴悲ヤ。アレヲ失テムズル事ノ悲サヨ」トオボスニ、目モ晩心モ消テ、夢ノ心地ゾセラレケル。　〔第六末「六代御前被召取事」四八三頁〕

右のように、北の方は家の滅亡により夫と死別し、又、子を捕らわれて離別するという幾重もの苦悩をしている。特に、傍線部「故三位中将ニ少モ違給ハネバ」と描写される六代の容貌は亡き夫を思い起こさせることによって、彼女の悲しみがより一層強調されている。ここで見過ごすことができないのは、北の方が夫のように子を亡くすのを恐れて歎いたものの、夫と別れる際と異なる行動をすることである。六代と別れる前に、彼女は数珠を渡して、波線部「何ニモナラムマデハ是ニテ念仏申テ、極楽ヘ詣レヨ」と述べた。このような北の方の言葉から、子の死を覚悟して、仮に彼が殺されるとしても、仏の力によって子を極楽へ導いてもらいたいという意

志を持っていることが読み取れる。このように、悲哀に暮れるばかりであった夫の存命中と異なり、離別による苦悩に向き合い、その苦悩を仏の力によって克服しようとする北の方の姿勢が見出される。このような姿勢はその後の場面において明確化される。六代が連れていかれた後、北の方の反応は次のように描き出されている。

「哀、我子ヲバイカニシテカハ失ワムズラム。是ハヲトナシケレバ首ヲゾ切ムズラム。イタシトヤ思ワムズラム。怖シトヤ思ムズラム。何ナリケル契、イカナリケル罪ノ報ヒニテ、カヽルウキメヲミルラム。観音コソサリトモ助給ワムズラムト、深ク恃奉リツルニ、遂ニ取ラレタル事ノ悲シサヨ。（中略）是ハ生ヲトシテ後ハ今ニ至ルマデ、一日片時身ヲ放タル事モナシ。朝夕二人ノ中ニヲヽシ立テ、明テモ晩テモ見ニアキダラズ。持マジキ物ヲ持タル様ニ覚テ、糸惜悲ト思ハ愚也。此三年セハ、今ヤ今ヤト、夜昼肝心ヲケシテ、明シ晩シツレドモ、只今俄ニ出来タル不思議ナムドノ様ニサヘ覚ルゾヤ、コヨヒニモヤ失テムズラム」ト、心中ニハナノメナラズ思ナガラ、遁ガタキ事ト思テ、「我ヲナグサメムトテ、イタクナゲカヌサマニモテナシテ、出ヅル面影、生々世々ニモ妄ルベシトモ不覚」。遂ニハ世ニアルマジキ者ナレドモ、責テハ今一度イカヾシテ可見」ト、音モ不惜一泣モダヘ給モ、ゲニ理ト覚ヘテ、ヨソノ袂モシホレケリ。

〔第六末「六代御前被召取事」四八四 - 四八五頁〕

北の方は子の命を心配し、大切に育ててきた子への恩愛の情を語った。傍線部のように、彼女はいつか子が殺されるだろうと、以前から覚悟しながらも、不安を抱えていた。波線部では、観音こそ子の命を救うことができると深く信じていたのに、とうとう捕えられたことが悲しい、と北の方は歎いた。後に観音の利生により、六代の助命が実現されたことを見ると、物語は観音の救済に対する彼女の疑心というより、観音の利生によって子の命を守ることができる、と以前から信じていた態度を暗示していると考えられる。

観音の利生に対する北の方の信心に関しては、文覚上人が六代の助命を引き受ける場面と、子の無事を聞く場面においても、明確に表されている。頼朝と懇意の文覚上人が六代の助命を引き受けたことを聞いた北の方は、文覚の行動を「是直事ニ非ズ、偏ニ長谷寺観音ノ御助ニテアレバ、始終モタノモシク」とあるように、観音の利生として受け取った。

又、六代が頼朝に赦免されたことを聞いた北の方の反応は、次のとおりである。

若君都ヲ出給ニケル日ヨリ此寺ニ籠給テ、夜昼御堂ニ臥沈テ、血ノ涙ヲ流テ祈申給ケル験ニヤ、大慈大悲ノ御誓、

罪アルモ罪ナキモ助給事ナレバ、昔モ今モカヽルタメシ多カリケリ。法花ノ普門品ニ云ク、「設復有人、若有罪、若無罪、杻械枷鎖、検繫其身、称観世音、菩薩名者、皆悉断壊、即得解脱」ト云ヘリ。末代ト云ナガラ、不思議ノ利生ト覚ヘタリ。観音ニ暇申テ泣々忿出給タレバ、若君ヤガテオハシタリ。

〔第六末　「斉藤五長谷寺へ尋行事」四九七頁〕

長谷寺に参籠中、北の方は六代の使いである斉藤五から子の無事を聞いて、子の助命の願いを成就させる観音の利生を賞賛した。子が逮捕され、都を出て以来、北の方は長谷寺に参籠してひたすらに子の無事を祈願したことや、観音の慈悲、法華経の経文を語ったことには、苦悩を克服するために、神仏の力に帰依するという北の方の姿勢が端的に表されている。岡田三津子氏は延慶本のこの場面を通じて、六代の助命および母子の再会の構想と、観音の利生との結び付きを指摘している。[8]

北の方は子との再会を遂げた後、六代に早く出家するようにと勧める場面まで登場している。六代は高雄で文覚上人に育てられ、十六歳になった年に高野山へ参って滝口入道から父の最期を聞いた。その後出家修行をして父の菩提を弔ったが、最終的に殺され、平家の子孫は永久に絶えた。

北の方が亡き夫の代わりに、子を育て、又、子の命を守るために観音の利生に帰依して苦難を乗り越えるという設定については、他の女性登場人物の記述にも存在している。例えば、『平治物語』においては、源義朝の妻である常葉は夫の死後、清水寺に参籠して子供の無事を祈ったという記述がある。最終的に、子が処刑を免れた際に、彼女は「一日片時も、命のあるこそふしぎなれ。これさながら、清水の観音の御助なり」と述べて、子の無事を観音の助けによるものと思っている。このように、北の方の後日談には夫の死後、妻が子の無事のために観音の利生に帰依するという典型的な設定が据えられていることが窺われる。

以上のように、北の方は夫と死別し、又、捕えられた子が殺されるかどうかという不安を抱き、苦悩が重なっている。苦悩の克服については、夫の存命中は、離別により嘆き悲しむばかりで、苦悩を克服しようとする行動が見られない。しかし、夫の死後、彼女は子との離別の苦悩に立ち向かうと同時に、子の命を守るために、再婚せず仏の利益に対する深い信仰を持って苦悩を克服しようとする。又、夫のために菩提を弔う役割を果たしたことは描かれていないものの、以前、夫に託された遺言に見られるように、菩提救済が求められている。このような北の方の言動から考慮すると、北の方は愛する者の無事を祈り、菩提を弔うという愛する者を救済する立場に置かれていることが窺える。それは先行研究の指摘のように、多くの女性登場人物の役割と共通している。では、

視点を変えて維盛の立場から見ると、北の方の造型には他の女性登場人物との相違点があるのかを次節で考察する。

三、維盛の最期における苦悩とその克服

本節では、維盛が一門から離脱する場面から、入水の場面までの彼の心情を分析する。先行研究の維盛と重衡の対照性、結びつきに関する見解に基づいて、維盛の恩愛による妄念の存在に着目して探ることとする。

維盛が一門から離脱する場面において、妻子への恋しさが募ったことと、平家を裏切るのではないかという宗盛らの疑惑に耐え切れないという理由により、維盛は三人の従者を伴いひそかに屋島を抜け出した[9]。紀伊国に着いた時、山伝いに都に戻って一度妻子に会いたいが、重衡のように生捕りとなって恥を晒し、亡き父の名を辱めるべきではないと考えた上で、上京せず高野山に向かった。ここに、妻子と再会するという願望を実現するより、名誉を保つことを決断した維盛の態度が窺われる。しかしながら、妻子と再会できないという悲しみは彼の心から離れない。

出家の場面において、滝口入道が髪を剃った際に、「「北方ニ替ラヌ形ヲ今一度見ヘ奉テ角モ成ラバ、思事アラジ」ト思食ゾ罪深キ。」とあるように、維盛は北の方と再会せずに出家することを後悔した。そのような思いは「罪深キ」と、物語から評されている。

恩愛で揺れ動く維盛の姿は、入水の直前にも繰り返される。

正ク向西一、念仏申給心中ニモ、「既ニ只今ヲ限レバ、争カ知ベキナレバ、風ノ便ノ言付モ、今ヤ〳〵ト待ンズラム。終ニハ隠有マジケレバ、此世ニ無者ト聞テ、幾計歎ムズラム」ト思連ケラレ給ヘバ、主従念仏ヲ止、合掌ヲ乱テ、聖ニ向テ宣ケルハ、「哀、人ノ身ニ妻子ト云者ハ、持マジカリケル者哉。①此世ニテ物ヲ思ハスルノミニ非ズ。後世菩提ノ障ト成ケル事ノ悲サヨ。（中略）本宮証誠殿ノ御前ニテ、夜終後世菩提ノ事ヲ申シニ、少者共ノ事思出サレテ、『吾身コソカク成ヌトモ、妻子平安ニ守給ヘ』ト申サレキ。且ハ神慮モ恥敷コソ覚シカ。只今最後ノ一念ナレバ、又何事ヲカ思ヒ増スベキニ、如何ニ聞テ悶絶コガレムズラムト思出サルゝゾヤ。是ヲホダシト云、是ヲ紀綱ト名付ケルモ今コソ思合ラルレ。②思事ヲ貽ス心ニハ罪深カムナレバ、懺悔スル也」ト宣ケレバ

〔第五末「惟盛身投給事」三四三-三四四頁〕

念仏を唱えながらも、傍線部のように、自分の死を聞いた妻子はどのように悲しみ嘆くだろうという妻子への思いが心中に浮かんできた。しかし、①波線部、維盛は妻子を、現世での物思いの原因、来世でも往生を妨げるものと思い、②波線部、念仏を唱えている時に、思い残すのは罪深いことだと

自覚している。ここで注目したいのは、仏の力に帰依し、妻子の無事を祈願する維盛の姿である。二重傍線部のように、自らの菩提とともに、妻子の平安も祈ったことに、現世における苦悩から妻子を救いたいという願望が露呈する。

滝口入道は維盛の悲しみを慰めるために、世の慣わしとしての離別を語りつつ、出家の利益や阿弥陀仏の救済を説法した。最後に、次のように述べている。

成仏得脱シテ悟ヲ開給ナバ、娑婆ノ故郷ニ立帰リテ、難去被思食一人々ヲモ導キ、悲ク思召ン人ヲモ奉見一事、環来穢国度人天ノ本願、ナジカハ疑ベキ。侍我閻浮同行人ノ誓約、少モ謬ルベカラズ」トテ、頻ニ輪(絵)ヲ打鳴シ、隙無ク奉勧一ケレバ、「可然善知識」ト喜テ、忽ニ妄念ヲ翻シテ、向西一叉手一ヲテ、高声念仏三百余反唱澄テ、即チ海ヘゾ入給フ。

〔第五末「惟盛身投給事」三四六－三四七頁〕

滝口入道は傍線部のように、成仏できれば娑婆の故郷に戻ることができ、悲しみに沈む妻子と再会して導くこともできると説いた。ここで注目すべきは、「難去被思食一人々ヲモ導キ、悲ク思召ン人ヲモ奉見一事」という説法を聞いて、すぐに妄念を翻し、念仏を繰り返して唱え、入水を遂げた維盛の姿である。このことから見ると、維盛は妻子との再会への期待と、彼らを極楽往生へと導きたいという意志をもったことにより、一心に極楽往生へ向かうことを決意したと見られる。

妻子を現世における苦悩から救おうとする維盛の行動は、別れる前に頼れる人がいない北の方へ、自らが亡くなっても出家せず再婚せよという遺言をしたことと、仏の利益に帰依し、妻子の無事を祈ったことにも見られる。さらに、最期の場面において、妻子を現世における苦悩から救うに止まらず、極楽往生へと導く、いわゆる後世救済したいという維盛の意志が見て取れる。妻子を救済しようとする維盛の行動は、物語を通じて一貫していると言えるだろう。又、このような維盛の姿勢を北の方の立場から考えると、北の方の造型には夫に救済される表象が見えてくる。

こうして、北の方の造型には前節で考察した愛する者を救済する他に、夫に救済される表象も見て取れ、愛する者を救済する役割のみ与えられる多くの女性登場人物との相違点が窺われる。では、夫に救済されるという北の方の表象は、物語が女人救済の構想を提示するために作り出されたのか、それとも物語の別の意図から生じたものなのか。

四重田氏は都落ち以後の維盛と重衡の記述の内容を対比し、幾つかの論点を取り上げている[10]。例えば、主従の関係に関しては、維盛が戦場を後にする際に、

常ニハ都ノ事ノミゾ恋ハ被思ケル。此浦ノスマヒ、浪上ノ有様、早晩ヲ可期ナラネバ、是モ三月十日、侍ニハ余三兵衛重景、近習者ニハ石童ト云シ童、舎人ニハ武里ト云シ男、此等三人ヲ召具テ、更闌人定テ、忍ツヽ屋嶋ノ館ヲ出給フ。〔第五末「惟盛卿高野詣事」三二〇頁〕

とあるように、三人の従者は共をする。又、重景と石童丸は後に維盛と一緒に出家入水し、武里も出家入水を望んだ。四重田氏は維盛のこの記述を「腹心の部下との心の絆が強調される」と述べ、それに対し「重衡は、「一所ニテ死ト契深カリケル」後藤兵衛尉盛長に見捨てられて、生け捕りの憂き目に合う。」という彼らの主従関係の対照性を指摘した。

又、重衡と維盛の恩愛や、愛する者との再会についても言及されている。一ノ谷合戦で生捕りされた重衡は、内裏女房と再会する前に「但最後ノ妄念トナリヌベキ事アリ。」と信時に述懐したように、妄念が残っている。又、北の方と対面した際に、「今ハ思ヲクベキ事ナシ。ヨミヂモ安ク罷ナンズ。」とあるように、最後に彼女と再会でき、この世に思い残すことはない、安心して冥途へ行くことができると述懐している。重衡は最後に愛する者と再会でき、互いに思いを語り合ったことによって、妄念から離れることができた。

恩愛による執着に囚われていない重衡の姿については、四重田氏は子がないという重衡の述懐に着目して論じている。

「重衡卿千手前ト酒盛事」の末尾において、

サテモ中将ハ御子ノ一人モオハセヌ事ヲ歎給シカバ、二位殿モ無本意事ニ思ヒ、北方、大納言佐殿モ不斜歎給ケリ。神明仏陀ニモ祈請シ給ヒキ。「賢クゾ御子ノ無リケル。有セバ何ニ心苦カラマシ」ト、責ノ事ニハ被思ケリ。〔第五末「重衡卿千手前ト酒盛事」三二〇頁〕

右のように、昔、母二位殿と北の方に子がないことを残念に思って歎いたが、生捕りされた今の自分を見て、子がなくてかえってよかったと重衡は吐露する。この重衡の述懐に続く「惟盛卿高野詣事」において、維盛は妻子と再会したいという思いに耐えられず、戦線を離脱して都へ向かったが、「本三位中将ノ被生取テ、京田舎人ノ口ニ乗ダニモ心憂ニ」という理由で、高野山へ道筋を変更したということが記されている。このような設定において、四重田氏は「妻子への恩愛を境として重衡と維盛を対照的に描くという『延慶本』の表現の構造」を指摘している。

先行研究で指摘されたように、子がなくてかえってよかったという重衡の述懐および重衡の生捕りのことをきっかけに、維盛が妻子との再会を断念するという設定から、恩愛の点で維盛と重衡を互いに結びつけながら、対照させようとする物語の意図が読み取れる。

ここで注目したいのは、維盛が重衡生捕りのことを考えて

恥を重んじたがために、妻子との再会を断念したという設定である。このような維盛の判断は、維盛が上京しないことを決意する場面、滝口入道に懺悔する場面、そして入水の場面と三つの場面に記されている。

《維盛が上京しないことを決意する場面》

故郷ヘ上テ、恋キ人ヲモ今一度見ン」ト思食ケルガ、様ヲ傷給ヘドモ猶人ニハ紛ベクモナシ。本三位中将ノ被生取テ、京田舎人ノ口ニ乗ダニモ心憂ニ、我サヘ憂名ヲ流テ、差シモ賢ニオハセシ父ノ首ニ、血ヲアヤサム事口惜テ、千度百般心ハ進給ケレドモ、恋ト恥トヲ比レバ、恥ハ猶モ悲テ、泣々高野山ヘ詣リ給ヒ

〔巻第五末「惟盛卿高野詣事」三二〇 - 三二一頁〕

《維盛が滝口入道に懺悔する場面》

古里ヘ如何ニモシテ尋入、不替形ヲモ今一度見ヘタカリツレドモ、重衡卿ノ被生取テ、京鎌倉嫐ハル、ダニモ心憂ニ、此身サヘ恥ヲサラシテ、父ノ骸ニ血ヲアヤサム事ウタテケレバ、是ニテ出家ヲシ、水ノ底ニモ入ナムト思フゾ。

〔巻第五末「惟盛卿高野詣事」三二一 - 三二二頁〕

《入水の場面》

若都ヘヤ上テ、今一度見モシ見ヘモセバヤトテコソ、迷出テ有シカドモ、本三位中将ノ被生取テ、京鎌倉恥ヲサラスダニアルニ、我サヘ捕ヘ搦ラレム事モウタテケレバ、思念ジテ加様ニ髪ヲ下シテシ上ハ、今更妄念有ベシトモ覚ヘザリシニ、本宮証誠殿ノ御前ニテ、夜終後世菩提ノ事ヲ申シニ、少者共ノ事思出サレテ、『吾身コソカク成ヌトモ、妻子平安ニ守給ヘ』ト申サレキ。

〔巻第五末「惟盛身投給事」三四四頁〕

ここで重要なのは、維盛が妻子への再会を断念する理由の提示である。三つの場面においても、波線部のように、妻子と再会しないという維盛の決意を語る際に、重衡の生捕りがその理由として取り上げられている。それに対し、傍線部の亡き父の名を辱めるべきではないという理由は、上京しないことを決意する場面と、懺悔する場面において語られているが、入水の場面にはない。入水の場面において、重衡生捕りという理由のみ取り上げる点から見ると、重衡の生捕りは維盛に妻子との再会を断念させる重要な要因として前面に押し出されていると考えられる。

維盛の入水の場面において、妻子と再会しない理由の語りに続き、二重傍線部のように、出家して妄念があるべきではないが、妻子のことを案じて仏に彼らの無事を祈ったとあり、妄念を露呈する。さらに、入水の直前、一心に念仏を唱える際に、妻子と再会し極楽往生へと導きたいという意志が表明されている。このような一連の出来事を見ると、物語が重衡

生捕りのことを、入水の場面で繰り返し語ることは、維盛に妻子との再会を断念させる要因だけでなく、妄念から離れられない維盛の最期へと展開する仕掛けと捉えられる。入水の直前に表される妻子を救済しようとする維盛の行動、あるいは、夫に救済される北の方の存在は、このような仕掛けの結果と考えられるだろう。このように、重衡と維盛を結び付ける仕掛けが設定されたからこそ、恩愛を持って往生を遂げようとする維盛の独自な有様が提示され、一方、夫に救済されるという北の方の独自性も引き出されると推定されるのである。

四、おわりに

以上のように、維盛の北の方は、恵まれない境遇や、夫子との離別などによる多くの苦悩を背負っていたが、最終的に、神仏の利益に帰依して、苦悩を克服しようとする者として造型されている。夫の存命中に死後の供養を託され、又、神仏の利益に帰依し子の無事を守ることは他の女性登場人物の造型にも見られ、類型的な妻母の役割と見做される。しかしながら、そうした類型的な造型以外に、往生を遂げて妻子を救済したいという維盛の意志が示されることによって、夫に救済される存在としての一面も浮かび上がってくる。そのような北の方の表象は物語が女人救済の構想を提示するために作り出すのではなく、重衡と維盛を対照的に結び付け、恩愛による妄念から離れられない維盛の最期へと展開する仕掛けから形成されたものと推測される。このように、夫に救済されるという北の方の表象は単なるその仕掛けの結果でありながらも、夫の菩提を弔って救済する役割のみ果たす多くの女性登場人物とは異なる特質だと言えるだろう。

注

（1）郭順伊「維盛北の方の造型」（『広島女学院国語国文学誌』三六　二〇〇六年十二月）

（2）池田敬子「心弱き人の往生―維盛―」（『軍記と室町物語』清文堂　二〇〇一年、初出一九七七年）

（3）牧野淳司「『平家物語』維盛身投げ物語の位置」（『日本文学』五七-七　二〇〇八年七月）

（4）秋山寿子「二人の三位中将―重衡と維盛をつなぐもの―」（『軍記文学の系譜と展開』汲古書店　一九九八年）は、重衡と維盛がそろって登場することについて、『公卿補任』や、『山槐記』を取り上げ、立后、中宮の出産、親王の立太子に際して、二人そろって登場し、中心的な役割を担っていることを指摘している。又、『右京大夫集』における二人の記述の位置については、「恋人の兄（維盛）との贈答」の記事の後に「重衡の鬼物語」「重衡とのよしなしごと」の記事が続いたり、重衡生捕りの記事の後に維盛入水の記事を置いたりという点からも、二人と個人的に親しくしていた右京大夫にとって、両者が無意識のうちにも連想されやすい間柄であったことが、垣間見える」と論じている。

（5）鈴木則郎「『平家物語』における平維盛像についての一考察」

（『東北大学文学部研究年報』二九　一九八〇年八月）

（6）四重田陽美「『延慶本平家物語』における維盛像の検討」（『大谷女子短期大学紀要』四十　一九九六年十二月）

（7）山根対助「維盛北の方の再婚をめぐって」（『日本文学』二一-十一　一九七二年十一月）

（8）岡田三津子「『六代御物語』の形成」（『国語国文』六二-六　一九九三年六月）は、延慶本において、大覚寺と長谷寺の二つの場面で母を探し求める苦労が描き出されることに着目し、「誰もいない大覚寺の宿所での六代の歎きと、長谷寺で一晩中人々の声を聞き分けようとする斉藤兄弟の姿。再会の喜びは、それを妨げるものを克服することで、より一層強調される。大覚寺でも会えない。長谷寺だと聞いて駆け付けても参籠の人々が多くて巡りあえない。その時に再会のきっかけとなるのが、観音経読誦の声である。長谷寺という場で、観音に祈る声に導かれて、つまりは観音に導かれて再会が果たされる。」と述べており、観音の利生が六代助命のみならず、母子との再会にまで及んでいることを論じている。さらに、延慶本は六代助命と母子再会のいずれの構想においても観音の利生を示しているのに対し、他の諸本は観音の利生による六代助命のみを重視することに注目し、延慶本と他の諸本における観音の利生の相違点を指摘している。

（9）平家一門の疎外者としての維盛の存在と、一門から離脱する際の心情について、鈴木則郎氏は、維盛が北の方と離別する場面における、「大臣殿サラヌダニ、惟盛ヲバ二心アル者ト宣ナルニ、今マデ打出ネバ、イトゞサコソ思給ラメ」という維盛の言葉から、「都落ちの時点から、二心ある者として猜疑の目でみられる自己をはっきりと自覚する維盛が捉えられていたが、都落ち以降の段階に至ると、それは妻子に対する思慕の情とオーバーラップする形で増幅し、維盛の行動を規定するとともに、維盛像に深刻な孤独感と暗い孤独の影を付与する結果となっているといえよう。」と論じている。

（10）四重田氏は維盛と重衡の記述の内容の他に、表現を対照している。例えば、彼らの妻と別れる場面において、

《重衡の北の方》

「恥ヲモ顧給ワズ、御簾ノキワニマロビテ出給テ、モダヘコガレ給フ。御音ノ遙ニ門外マデ聞ヘケレバ」

《維盛の北の方》

「恥ヲモカヘリミズ、スダレノキワニマロビフシテ、声モヲシマズヲメキ給フ」

四重田氏は別れに堪えきれず御簾の側に駆け寄り、御簾の傍らで悲歎に暮れるという重衡と維盛の妻の姿の描写に着目し、彼女たちの記述における愛し合う夫婦の別れの表現に類似が見られると指摘している。

使用テキスト

- 『延慶本平家物語本文篇上』（勉誠社　一九九〇年）
- 『延慶本平家物語本文篇下』（勉誠社　一九九一年）
- 『新編日本古典文学全集46　平家物語2』（小学館　二〇〇六年）
- 新日本古典文学大系『保元物語・平治物語・承久記』（岩波書店　一九九二年）

※引用に際し、一部の漢字を該当する常用漢字に改めた。

（Kanapat Ruenpirom　本学大学院博士後期課程）